Japan Evangelical Lutheran Association

JELA NEWS

ジェラ ニュース　第26号　2011年11月15日発行　発行責任者 森川 博己

日本福音ルーテル社団　〒150-0013　東京都渋谷区恵比寿1-20-26　Tel.03-3447-1521　Fax.03-3447-1523　jela@jela.or.jp　www.jela.or.jp　口座番号 00140-0-669206　加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援／アジア子ども支援／ブラジル子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア（祈りのたて琴）研修講座／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

「お前たちは、わたしが飢えているときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ. はっきり言っておく. 私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」　マタイによる福音書　25章35節～36節、40節

今夏も米国のグループ・ワークキャンプに参加しました

7月21日から8月4日まで、青年5名とスタッフ2名の合計7名が参加しました。ホームステイは、元在日宣教師のデービッド・パーソン牧師が牧会されているセント・ルーク・ルーテル教会（ミネソタ州）のお世話になりました。セント・ルークの若者と共に参加したキャンプは同州バーンズヴィルで行われ、全米から集まった300人の青年といっしょに、キャンプのテーマ「Connect」（つながる）とテーマ聖句「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」（ヨハネ15：5）について考え、分かち合いの時間を持ちながら、奉仕を行いました。今回のキャンプで42棟の家屋を修繕することができました。

[この号にはこんな記事が]

米国グループ・ワークキャンプ（2011年参加者レポート／2012年募集要項）……2　難民支援事業の新展開（森下真帆＋ルーテル学院大学社会福祉学科フレッシュマンゼミ）……4　目標への第一歩（ルインティンマウン）……5　「クッキー子ども支援」から見えてくるもの(中島愛)……6　一人のためだけの歌と祈り……7（磯村直美）　お知らせ（ワインパーティ／一日神学校で出店／新しいJ3／支援者一覧）・編集後記……8

グループ・ワークキャンプ2011「つながり」参加者レポート

【沿革】1977 年、米国コロラド州を襲った大洪水の被災者を支援するために、米国のキリスト教青年書専門出版社「グループ」がボランティアを募り、全米から集まった 300 人により始まった、貧困地区の家屋修繕と賛美集会を組み合わせたワークキャンプ。キャンプ名に「グループ」がつくのはこのためである。現在は全米・カナダ及びその周辺の 50 以上の地域で毎年夏に開催され、様々な教会・教派の青年が数万人参加している。日本からは 2001 年以来、ほぼ毎年派遣している。クリスチャンでなくても参加できるが、すべてのプログラムがクリスチャンむけに計画され、信仰を育む目的で作られている。

西川晶子（JELC 室園教会牧師）

今回の GWC のテーマは「Connect（つながり）」でしたが、日本から行った私たちにとっては、まず「普段のつながりを断ち切る」ところから、チャレンジが始まったのではないかと思います。まず、家族や日本の友だちから切り離されて、言葉の通じない海外に出発しなければならない。実際に GWC 本番に入ると、そこでグループはばらばらになって、それぞれのクルーに分かれることになる。

ですが、いつものつながりから離れてこそ、見えてくるものがある。そのことを実感できるキャンプにもなったのではないかと思います。逃げ出すことはできない、やるしかない状況の中で、5 人のキャンパーは、出会うクルーのメンバー、目の前の仕事にしっかり向かい合って、楽しんでいました。もちろんコミュニケーションの苦労が大きかったメンバーもいましたが、それでもしっかり踏みとどまって、自分なりのつながりを作ることができていたのではないかな、と思います。

また、周りの人たちがすれ違うたびに「オハヨー」「コンニチハ」と声をかけてくれたり、日本語を覚えようとしてくれたり、私たちと「つながってくれようとする」キャンプでもありました。

何より、「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている」（ヨハネ 15：4）の言葉のとおり、このキャンプを通してずっとわたしたちとつながっていてくださったイエス様に、感謝します。

毎日のプログラムやディボーションをとおして、ある子が「自分の中のイエス様が少し変わった気がする」と言ったくらい、じっくり神様と向き合う機会が持てたのは、本当に大切な経験だったと思いますし、そのように感じてくれたのが、本当に嬉しいと思いました。

◀針田真由子（JELC むさしの教会／16 歳）

クルーの中で最も仲良くなれたレイチェルは、「May は大きな地震があった日本から来ていて、私は竜巻で家が大きな被害にあったというところでつながりがある」ということを話してくれました。ほかのクルーたちも、はじめは言葉の通じない私に戸惑っていたけれど、時間が経つにつれて心を開いてくれました。

横井里月（JELC 松橋教会 /16 歳）▶

日本語に訳しても内容がとても難しく、あきらめかけていた毎日のデボーション。みんなは私が英語をうまく話せないことを理解していたにも関わらず、輪の中に入れてくれてとても嬉しかったです。この Connect が途切れることがありませんように！

山本花央（JELC 蒲田教会／ 16 歳）▲

作業 1 日目は本当に 1 人ぼっちで、誰も指示をしてくれないので何をしたら良いか分からず、ひたすらはがした破片を拾っていました。すると、クルーの 1 人の子が私に話しかけてくれて一緒に手伝ってくれました。私はこの時、人と繋がるにはただ待っているだけでは駄目だということを改めて思いました。

荒井祥平（JELC 横須賀教会 /16 歳）▶

ワークキャンプは楽しむだけではなくキリストについて考え直せる時間だった。俺は、いままでキリスト教を間違えて考えていた気がする。一緒に痛みを耐えたり、神様からの返事を待つという、そういった心構えなしに生きてきた気がする。いつも、すぐに答えがでないとあきらめ、ネガティブに考えて生きてきたと思う。だから、ありのままの自分で生き、耐えて神様からの返事を待つという生き方をしたい。

古島光（熊本県／ 16 歳）▲

神様がこの機会をくださって、いろんな人たち、クルーやケイティー達と出会わせてくださったことに、とても感謝したいです。やっぱり、人との出会いは神様が考えてくださっていることを実感しました。なので、これからは今までより、出会いを大切にしていって、大切な友達をたくさん作りたいです。神様は私たちをいつも見守っていてくださっていることを、このキャンプで深く実感しました。

米国グループ・ワークキャンプ２０１２　参加者募集

以下の要領で参加者を約 10 名募集します。申込期限は 2012 年 1 月末日（必着）です。

◆派遣期間：2012 年 7 月 24 日（火）～ 8 月 7 日（火）
◆内　　容：マサチューセッツ州でのホームステイとワークキャンプ（家屋修繕、聖書の学び等、参加者の信仰的・人間的成長を促すプログラム）に参加。
◆参加費用：22万円（パスポートやビザ取得費用及び海外旅行保険費用は自己負担）。
◆問合せ・申込用紙請求先：
JELA 日本福音ルーテル社団
住所：150-0013　渋谷区恵比寿 1-20-26
電話：03-3447-1521 ／ファックス：03-3447-1523 ／
E-mail: jela@jela.or.jp
◆選抜方法：2012 年 1 月末日までに到着した申込書の中から派遣者を決定し、2 月中に派遣の可否を申込者に連絡します。

＜注意事項＞
!201 2 年 8 月 1 日現在の年齢が 14 歳～ 20 歳の方が応募できます。
” ルーテル教会員でなくても、クリスチャンでなくても参加できますが、聖書を学び話し合う時間が毎日あり、すべての行事に積極的に加わることが求められます。
牧師等数名の日本人成人が同行し、霊的・言語的側面から日本人参加者を支えます。
$ 米国の主催団体との手続きに時間がかかるため、申込期限が 1 月末日になっています。
%派遣確定通知受 領から出発までの間にキャンセルされる場合は、その時点までに発生した費用をいただくことがあります。また、海外の事情や災害その他により、日本からの派遣を中止する場合があることをご承知おきください。
&派遣確定 者にはパスポートが必要となりますので、まだお持ちでない方、更新が必要な方は、派遣確定の連絡を受けたらすぐにパスポート取得手続きを行ってください。
’ 派遣確定 者には、日本福音ルーテル教会が毎年 3 月下旬に実施している青少年向けキャンプ「春の全国 Teens キャンプ」への参加をお勧めします。教会になじみのない方は、クリスチャンのキャンプを体験しておくことが望ましく、米国に行く仲間どうしが出発前に親しくなる機会でもあります。「春キャン」の詳しい情報は、米国派遣決定通知送付の際にお知らせします。

難民支援事業の新展開

この４月に二つ目のジェラハウス（日本に住む難民の方に無料で部屋を提供する施設（写真右）が稼働し、JELA の難民支援はいままで以上に充実した活動を実施しています。以下では、新しいジェラハウスで行われている日本語レッスンと、大学ゼミ学生の訪問の様子をご紹介します。

日本語ボランティアをはじめて

ルーテル学院大学総合人間学部
キリスト教学科３年生　森下真帆

私は６月から、JELA ハウス２に入居されている難民の方々に日本語を教えるボランティアをしています。

○ボランティアをしようと思ったきっかけ

在学中のルーテル学院大学と関係が深いことから、JELA の存在は知っていました。ボランティアをさがしていたおり、JELA のホームページで日本語教師のボランティアを募集しているのを見つけ、将来日本語教師を目指していることもあり応募しました。

○行っている内容

他のボランティアの先生と協力しながら、週に１回、90 分の授業を行っています。毎回２～６名程度の出席者があり、それぞれのニーズに応じた授業を行うよう心がけています。季節の話題や時事的な話題も取り入れ、お客さまも積極的にお迎えする柔軟な授業です。

また、文化紹介の時間を月に１回程度もうけ、難民のみなさんに様々な日本文化を体験してもらっています。７月には七夕、９月には書道を行い好評でした。10 月は温泉を紹介した後、足湯を体験する予定です。

書道が初めての難民学生の作品

○その意義や思い

難民についての知識をほとんど持たずに始めたボランティアでしたが、彼らと関わるごとに、彼らの置かれた状況の深刻さを思い知ります。彼らが本当に必要としているものは、私には与えることができない、私にはなにもできないという思いにとらわれることもあります。しかし初心に返って、日本語の授業を通して難民のみなさんの役に立つことを第一に考えるようにしています。

またボランティアの日本語教師たちは、難民のみなさんのよき話し相手でもあります。日本で生活する上での不安や不満、母国でのつらい体験など、涙ながらに、時には怒りをあらわにして話される方も少なくありません。今はただただそれを聞いてあげることしかできませんが、誰かに話すことで彼らの心が慰められることを願っています。また、そんな状況だからこそ、授業の中では楽しいことをと思い、日々楽しい授業づくりを心掛けています。今は授業のたびに自分の力不足を痛感し、反省することばかりです。質問にうまく答えられないことはしょっちゅう、難民のみなさんが話す英語が聞き取れず、うまくコミュニケーションが取れないことも多々あります。しかし毎回授業を楽しみにしてくださる難民のみなさんや、的確なアドバイスをくださる先輩の先生方に支えられて、このボランティアを続けています。これからもよりよい授業を目指して、前向きにボランティアに取り組んでいきたいと思っています。

ジェラハウスで日本語を教える森下さん

新しいジェラハウスを訪問して

ルーテル学院大学社会福祉学科
フレッシュマンゼミ・グループ一同

９月８日の午前中、ルーテル学院大学総合人間学部社会福祉学科１年生６名と教員１名で、新しいジェラハウスを訪問させていただきました。私たちは、大学でフレッシュマンゼミに所属して、「難民・移民の地域生活支援」というテーマで学習を進めています。そこで、ジェラハウスを訪問させていただき、難民の方々がどのような経緯で日本に来られたのか、そして、ジェラハウスでどのように生活されているかについてお話を伺うことにしました。

ジェラハウスは、東京都内の住宅街にあるため、普通に住んでいても気づかないような地域にあります。アパート型の１DK の個室に利用者の方は生活されていて、プライバシーが保たれています。多目的スペースでは、日本語教室が開かれていて、当日は、４、５人の方々が参加されていました。私たちは、日本語の先生のご指導のもとに日本語教室の皆さんとグループになり、日本語の練習も兼ねて、お互いに自己紹介をしたり、自分の出身国の様子、そして、これから日本でどのような生活を描いているかなど、お話を伺いました。

私たちは、ジェラハウスを訪問してみて、難民の方々が常に自分の身の危険を感じながら母国で暮らしていたこと、そして、日本で生活していてもいつ強制送還されるかわからない恐怖心を抱えながら生活されていることがわかりました。一方で、日本に辿りついても難民の方々にとって厳しい現実にありながらも、将来へ向けて希望をもって日々生きていることを直接お伺いすることができました。これは、大学の講義だけでは得られない貴重な学びの機会となりました。

日本の難民受け入れ体制は他国に比べると不十分な点が多いことから、難民性の高い人ですら難民申請の手続きをすることを躊躇して、仲間の助けだけを頼りにひっそりと暮らしている現実があります。このような現実からジェラハウスへの期待も大きいことを感じました。難民の方々の必要を把握して、効果的な支援を提供することが支援する側の課題であることもわかりました。

訪問を通して、私たちは、難民の方々が社会から孤立することなく、地域住民の方々とつながりを築いて、地域に溶け込んで安定した生活を一日でも早く実現できるよう願いたいと思います。

認定難民のミョウさん（左端）の部屋で話を聞きました。

国際青年交流奨学金

JELA では、日本から世界、世界から日本へ留学し、将来自国に役立てる思いから大学や研修施設で勉学する方に奨学金を提供しています。日本で難民となり、日本の高等教育を受けたい人も支給対象です。今回はその中から、ミャンマー出身の難民、ルインティンマウンさんの記事をご紹介します。

目標への第一歩

亜細亜大学・国際関係学部国際関係学科
２年生　ルインティンマウン

私はミャンマー出身で、小学校６年生の二学期に来日しました。私は小学生の頃から日本に行くことが夢で、その主な理由は、私が母のお腹の中にいる時に母国を去った父に会いたいということでした。私が来日して父に会えたこと、それは同時に私たち家族五人が初めて一緒に暮らすことができた時でもあります。家はあまり裕福ではありませんでしたが、家族全員で暮らせることがとても嬉しかったです。

来日して家族が一つになり楽しいことばかりでしたが、来日２日後に小学校が始まってからは日本語がわからなくて苦労しました。小学校では先生と一対一の授業をしてもらい、毎日日本語漬けの日々でとても大変でした。しかしながら、毎日の生活や学校の行事の中で、日本語がわからない私に対して周りの人たちは優しく接してくださり、また友人もできたりといったことを通じて、日本人の優しさに感動しました。

中学ではテニス部と駅伝部に入り、日本語の勉強をしながらの部活漬けの毎日がとても楽しかったという思い出があります。そして高校受験が近づき、周囲が受験体勢に入る中で私も受験勉強の毎日でした。幸運なことに、駅伝で好成績を残していたため、高校に入学することができました。

高校では少しずつ自分が将来やりたいことを考えはじめ、その結果、私は海外と繋がりのある仕事や自分のミャンマー語の能力を生かした仕事がしたいと思うようになり、そのためには大学に行かなければいけないと思いました。そのときはまだ家計のこと、入学金や授業料のことはあまり考えていなかったのですが、なんとか志望の大学に合格しても、入学金や授業料を支払って無事に通えるのかがとても心配でした。

大学の授業料の支援を受けるために様々な方法を探しましたが、どれもうまくいかず、大学に通えないのではないかと思いました。そのような時に日本福音ルーテル社団さんに手を差し伸べてもらい、授業料など学費の全額サポートを受けられるようになり、無事大学に入学することができました。

その後、半年近くのアメリカ留学も経験し、今までにない素晴らしい体験をすることができました。アメリカでは人々がフレンドリーで、勉強面や将来に対する姿勢、自分の考え等を堂々と言える人が多く、とても刺激を受けました。

留学を経験することができ、そして自分の将来の目標に少しずつ近づきながら授業料の心配をせずに勉強ができるのは、日本福音ルーテル社団さんのおかげです。私は周囲から多くの助けを受けているので、大学卒業後は少しでも人の役に立てるような人間になりたいと思っています。

留学時の寮のルームメイト（左側）と。

東日本大震災被災者支援

「クッキー子ども支援から見えてくるもの」

中島　愛(JELA 職員)

JELA の東日本大震災被災者支援活動の一つとして、これまで岩手県宮古市、陸前高田市、大船渡市、宮城県気仙沼市、仙台市若林区の幼稚園、保育園など 32 施設へ 2609 個のメッセージ付クッキーをお届けしており、また 73 施設より 5675 個のご希望をいただいていて、合計 8284 個のクッキーを年末までにお届けすることになっています。

メッセージ付クッキーをお届けするにあたり、単に物資としてお届けするのではなく、この支援に賛同して絵入りメッセージを送ってくれた子どもたちの気持ちを伝えたいと、お届け方法を色々と模索してきました。そこで考えついたのが、訪問の了解をいただいた施設へは、メッセージと一緒にいただいた子どもたちの写真 (メッセージを書いている風景や集合写真) と絵入りメッセージを幾つかプリントアウトして紙芝居を作成し、先生もしくは子どもたちに見てもらう、というものです。「佐賀県に行ったことある人〜?」、「これは何の絵でしょう?」などと会話をしながら紙芝居をお見せすると、先生方や子どもたちから笑顔がこぼれて、その笑顔に逆に元気をもらっています。その際、震災から半年以上経った様子を岩手県宮古市の 3 施設で聞かせいただいたので皆さまとお分かちしたく以下に抜粋いたしました。※HP には、他の施設からお聞きしたことも掲載しています。

ホテルの宴会場で保育をしている田老保育所

田老保育所

行方不明の園児が 1 名。被災前の園児の数は 50 名。現在は、宮古市内や盛岡市に引っ越したため 35、6 人。被災直後は、お菓子が救援物資として届いていたが、保護者に車がないので受け取りに来られなかった。子どもたちは元気。震災直後の 1、2 ヶ月は親が震災の影響を引きずって話せなかったため、それに子どもが敏感に反応していた。園としては流行する病気に注意をしていた。田老町の主な職業は、父親は漁業、母親は加工場で働いていたため、町が全壊したので仕事がない。瓦礫の撤去などの臨時の仕事はあった。仕事のある宮古市は、田老町から遠いことや土日休めない等の理由から中々続かない。仮設に入っている子は 3 分の 1。震災当日は逃げるので精いっぱいだったため、津波を見ている園児はいない。突然警報が鳴り、中学校へ逃げて校庭で点呼をとっていた。再度警報が鳴ったので、中学生に子どもたちを引っ張ってもらいながら、声を掛け合い裏の山へ逃げた。山へ登って振り返って校庭を見ると津波が大きな渦を巻いていた。逃げる際、津波は見えず茶色の砂煙が見えた。ゴーゴーという大きな音だけが聞こえていた。子どもたちが避難してきた大人に押しつぶされないように、近くにあったお寺の部屋を貸していただいた。19 時が満潮と聞かされていたので、津波が心配で 18 時までは外にいた。雪が降ってきた。夜は何度となく余震で起きた。必死だった。夜が明けると車と家が押しつぶされている現実を見た。ショックだった。火事も起こっていた。次の日は線路を歩いて保健所に移った。保護者がやっとの思いで園児を迎えに来た。震災直後は線路の上を行き来していた。職員が自宅へ帰宅したのは 2 日後。自宅が被災していない職員は避難所で子どもたちやその家族の支援をしていた。

崎山保育所

保護者 (父親) を亡くした園児は 1 名。自宅が流されたのが 3、4 家族。仮設から通っている園児 2 名。近くの避難所 (小学校) に支援物資が集まっていた。公立保育所なので支援物資を頂くのもためらわれたが分けてもらうことができた。3 月 12 日に保育所再開、13 日から電気が復旧、15 日から保育を開始、18 日から汁物だけ提供、23 日から救援物資などで給食を提供した。最初は 2 名の登校だったが、17 日から 7 名、23 日から 24 名に増加、26 日には卒園式を迎えた。ガソリンが不足したため、避難所から歩いて来園していた。保育所が高台にあるため園児は津波を見ていないが、当初は余震に敏感で先生から離れようとしなかった。震災後、被災して実家に戻ってきた 3 名が入所した。一人の母親はショックを受け鬱状態。保護者のケアは大切。父親の中には漁業から大工 (サラリーマン) に転職をしたが収入が減るなど抵抗がある人もいる。家は跡形もなく瓦礫で覆われ、遺体が庭に流されてきていたり、職を失うなどのショックから夜眠れなくなり、病院から安定剤をもらって服用している保護者もいる。

赤前保育園

保育園の目の前まで津波がきた。玩具等何もかもなくなったり、避難所から仮設へ移動したりと状況の変化はかなりあった。避難所では家族全員で抱きしめ合っていた。今は仮設に入り大人も落ち着いている。子どもたちは保育園にいる間は遊んだり、給食があったり、玩具があったりと幸せ。極力安定した保育をしていたことが子ども自身の生活を立て直してきたような気がする。また保育所に来ている間は家族も身内を探したり、避難所で必要なものを探したり、仕事を探したりできるし、救援物資も保育園に届いていたため安心していた。職員の中には被災した者もいて、皆疲れていたが、心を一つにして色々なことをやりとげ、一つ乗り越えた感触。震災当日は仮園舎だった。波が見えたのでバスに乗せて新しい園舎へ逃げて、そこから地域の避難所に向かった。一晩子どもたちと避難所に宿泊した。子どもを全員帰した後、交通止めで帰れない職員は避難所に残った。ほどなく建設中であった園舎が完成し水も確保できた。給食も作れるようになった。大人が思う以上に子どもは現実を受け入れている。逆に大人が悲しい顔をしているのが子どもは一番悲しい。就職などの不安から家が落ち着かないと、夫婦同士言葉が乱暴になるなど、ちょっとしたことでケンカになる。子どもはそれを敏感に感じている。職員は一緒に笑うように努めている。また子どもをほめると保護者の心も和らぐ。

お話を聞きながら、先生方の子どもたちに対する愛情の深さと責任の重さを実感しました。震災当日は必死の思いで子どもたちを守り、一日も早く子どもたちの自宅が落ち着くようにと施設を開所し、保護者に寄り添い、地域と連携をしながら 3 月 11 日から半年以上経った現在まで、先生方自身が被災されたりご家族が被災されている中で、仕事という枠をとうに超えたお働きをされており、果たして自分だったらそこまで出来るのかと深く考えさせられました。

そして半年以上経ち、当初よりも子どもたちもだいぶ落ち着いてきて、施設も保育の場に戻りつつあり、一つ乗り越えられた感触はおありだけれども、新たな問題に直面されていらっしゃることを強く感じました。東北の冬は厳しいと言います。被災地の子どもたち、そのご家族、幼稚園・保育所の職員の方々を皆さまのお祈りに覚えていただければ幸いです。そして私たちに出来ることは?　それぞれに再度考えてみませんか?

崎山保育所の園児たち

リラ・プレカリア(祈りのたて琴)

JELA は、病床にある方等に寄り添い、ハープと歌で祈りをささげるリラ・プリカレアの奉仕者を養成していますが、今回は、歌の指導講師の一人・磯村直美さんに、このプログラムとのかかわり、指導にあたっての心がまえ等について書いていただきました。

一人のためだけの歌と祈り

リラ・プレカリア(祈りのたて琴)
ヴォイス講師・磯村直美

『男はつらいよ』の映画が大好きな私は、山田洋次監督の映画はほとんど観ています。『おとうと』ももちろん観に行きました。その中で、ベッド脇で一人の女性がハープと歌を奏でているシーンが出てきます。映画館で「こういう活動があるのだな……」と映画の内容よりもその一場面が気になったのを今でも覚えています。それがリラ・プレカリア (祈りのたて琴) との初めての出会いです。それから数週間後、歌の指導を手伝ってほしいとのお話をいただき、それが映画の中に出てきた活動を学ぶ研修講座で、ハープと歌を奏でていたのがキャロル・サックさんご自身だと知りました。私は、この場所に導かれたと強く思いました。幼い頃にマザー・テレサさんに心うたれ、私にも何かできることがあるだろうかと、聖フランシスコの平和を求める祈りの中にある「私を貴方の道具としてお使いください。」と神様に祈り続けてきました。その祈りは今も続いていますが、リラ・プレカリア (祈りのたて琴) の皆さんと出会った最初にその祈りを一緒に唱えたことにも驚きました。

私は今まで、たくさんの人に届く歌声を学び、その実践を意識してやってきました。しかしリラ・プレカリア (祈りのたて琴) での祈りの歌は、一人のためだけにあります。その方の呼吸に合わせ、その方の世界にそっとお邪魔して、そっと寄り添います。その方のためだけに祈ります。祈りの歌には立派な歌声は必要なく、祈る「心」が何よりも大切なんだと、携わらせていただいている中で感じていることです。そしてそれは、レッスンの中でいつも伝えたいと思っていることです。

リラ・プレカリア (祈りのたて琴) の祈りの音楽にふれ、その不思議な力を体で感じ、今もまだ言葉では表現できない感情が私の心を巡っています。神様の恵みがそそがれる素晴らしい働きの中に身を任せ、用意された道にただ感謝するばかりです。この場所から、たくさんの祈りの音楽が広がっていくことに希望をふくらませています。

お知らせ

一日神学校で出店しました

9月23日(祝)にルーテル学院大学にて「一日神学校」が開催され、JELAは昨年に引き続き「アジアこども支援―インド編」としてブース参加をしました。JELAの支援先施設CRHPの活動「HHP(学校に行けず、家族を養っていかなければならない10代の女の子たちを支援するプロジェクト)」で女の子たちが作った手作りアクセサリーやランチョンマットなどの雑貨と、マサラ・チャイ(スパイスの効いた甘いミルクティー)を販売しました。今年はインド・ワークキャンプ参加者と心ちゃん、虹ちゃん(JELC千葉教会 小泉嗣牧師の娘さん二人)が販売を手伝ってくれました。売上金は全額「HHP」に寄付されます。ご協力ありがとうございました。

(JELA職員 松岡あゆみ)

チャリティ・ワインパーティのおしらせ

12月9日(金)午後6時半から東京・恵比寿のジェラミッションセンター1階にて、恒例の「世界の子ども支援チャリティ・ワインパーティ」を開催します。今年の収益は、東日本震災救援と復興支援のために用います。ワイン以外の飲物と食べ物もたくさんご用意します。参加費は2千円です。当日会場受付にてお支払いください。皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

WELCOME! 新しい短期宣教師(J3)のみなさん

9月下旬にアメリカ福音ルーテル教会よりJELCに派遣された4名のJ3が来日し、現在ジェラ・ミッションセンターで語学研修中です。初来日のパトリック・ミアーズさん(イリノイ州シカゴ出身。写真左端)は、アニメがきっかけでコンピュータの絵の技術を学び、中学・高校や知的障害者の学校で美術教師をしていました。サッカー好きのルーカス・シャテレンさん(ノース・ダコタ州ファーゴ出身。写真左より二人目)は、2008年に東北大学を拠点とした伝道経験もあり、今年の東日本大震災の後にも、ボランティアとして来日しました。ラリーとリサのリトフスキー夫妻(ミネソタ州ミネアポリス出身。写真右二人)は、1990年代初期に来日して英語を教えた経験があります。ヨガが趣味のリサさんはアメリカでもESLの教師を務め、ドイツ語と多少のロシア語、ギリシャ語が話せます。ラリーさんはドラムが趣味で、長年バンドを組んでいました。

彼らは東京での語学研修を終えると、教会や学校などへ派遣され、新しい任務に就くことになります。。

支援者一覧

(2011年7月1日〜9月30日)

阿波田絹子／石崎勝／石田浩子／泉真琴／泉亮・洋子／日本福音ルーテル市ヶ谷教会／市吉信行／伊東節子／遠藤邦子／大谷忠雄／日本福音ルーテル大垣教会／大塚眞佐子／片岡宏一郎／加藤裕子／上窪松子／神谷智子／紙谷守／京谷信代／倉重ミドリ／小出邦子／小菅裕司／近藤美知子／斎藤實／佐久原百合子／須永敏子／髙田紀子／高橋ふく子／竹森洋子／田島一水／日本福音ルーテル玉名教会／徳矢紀子／となりびとの祈り／野口玲子／芳賀美江／ハーベスト企画／東山義夫／藤井浩／三浦房子／右谷孝子／南節子／持塚富美子／P・Bencke／山県順子／山際喜佐夫／山本一男／山本武子／山本了／若原奇美子／渡辺聡／淀川キリスト教病院

他匿名複数

以上、敬称略。ご支援ありがとうございます。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集後記

クリント・イーストウッドの『グラン・トリノ』を見た。私はこの映画から、イエス・キリストの十字架の死を思い浮かべた。「受けるよりも与えるほうが幸いである」と言われたイエスは、ご自分を人類のために与えてくださり、その愛と復活のいのちをいただいた者に、「互いに愛し合いなさい」と命じられた。たしかに、「私たちの人生は自分だけのものではなく、自分をぜひとも必要としてくれる、すべての人のもの」(エリ・ヴィーゼルの言葉)であり、「どんなものでも、人と分かつことができて、初めて自分のものとなる」(C・S・ルイスの言葉)と言えるのではないか。難民支援、ボランティア派遣といったJELAの事業の一つひとつが、このような事柄への気づきを与えるものであればと思う。(M)

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association
日本福音ルーテル社団